

1、テキスト

「左右田博士に答ふ」「五」の第7段落319頁最後の行「以上述べた如く」から320頁後ろから3行目「含まれて居なければならない」まで。

2、キーセンテンス

320頁後ろから7行目～6行目

「私の場所というのは、単に一般概念という如きものではなくして、特殊が於てある場所である、対象を内に映して居る鏡の如きものである。」（加線筆者）

同後ろから6行目～3行目

「かく云へば、鏡と対象が別のものと考えられるかも知れぬが、一般が特殊を自己自身の限定として、之を自己の内に成立せしめると共に、特殊に対しては何處までも一般者として特殊とはならない、単に特殊が之に於てある無なる場所と考へられた時、自己の中に自己を映す鏡となるのである」（320頁後ろから6行目～3行目）

3、問い

知るということは、作用ではなく、場所に於てあることである。即ち、いい尽くせない特殊なもの（具体的な個物）が一般者（無の場所）に包摂され、それによって初めてありのままに映し出されることである。しかも物と場所（鏡）は別物ではない。個物が映し出されることは、一般（場所）が「自己の中に自己を映す」ことである。即ち、「無」の場所（一般）は自己自身を限定し否定して有（特殊）となると共に、特殊となった一般が一般に包摂されるから、それによってありのままに映し出される。個物がありのままに我々に立ち上がることは、絶対無が自己否定して、我々の既存の価値観や認識を突き破って我々に立ち上がるかと考えていいか。その場合、絶対無（場所）も個物（認識対象）も認識主観も同一で自己そのものであるが、絶対無・一般が自己否定して個物・有となるには、自己だけではなく、他者がそこに入るのではないか。